

宮城公博 著

## 『外道クライマー』

およそ気品と知性とは真逆、下品で野蛮な著者達の生き様を紹介するのは少し躊躇うものがあったが、今時こういう若者達が少数ながら存在するというのが面白いし、その反骨精神と冒険心には共感出来るところもあるので、あえて取り上げてみる事にした。

まず目次を拾ってみよう。

1. 逮捕！日本一の直瀑・那智の滝
2. タイのジャングル46日間の沢登り
3. 日本最後の地理的空白部と現代の冒険
4. 台湾最強の渓谷 チャーカンシー etc



そうなのです。著者は2012年7月、世間の矚意を買った日本一の滝「那智の滝」登攀を試みて逮捕されたクライマーの1人なのです。ニュースを聞いた時私は秘かに未知の地に挑戦するその心意気に拍手喝采を送ったのだが、マスコミは「神域を穢すとはけしからん」と非難ごうごう、逮捕された3人は職を失う等大きな代償を払わねばならなかった。わが周辺でも日頃信仰心とはエンもないような者まで「ご神体を穢すとは」と怒りの声をあげていたもので、日本の社会は若者の「冒険」や「探険」という行為に理解がないなあ、相変わらずだなあと考えたものだ。

そこで思い出したのが、1962（昭和37）年8月の堀江謙一氏の太平洋単独ヨット横断時のわが国民とマスコミの対応である。第1報を聞いた世間の反応は日本の若者がヨットで「密出国」、「パスポートも持たず違法」、海上保安部は「不法出国」で捜査の方針、身柄は直ちに「強制送還されるだろう」と非難の声ばかり。それがサンフランシスコ市長が「コロンブスもパスポート無しだった」「これは偉業である」と名誉市民として受け入れたと知ると、途端に手のひら返して英雄扱いというドタバタ劇。日本人の意識は当時とさして変わっておらず、残念ながら「冒険」への理解が広がっているとは言い難いのである。

それはまあさておき、那智の滝で逮捕され職を失い苦汁を舐めた著者だが、そんな事位ではまったく凹まず、立て続けに立山・称名の滝、タイのジャングル、台湾の峡谷へとしたたかに困難な山行を繰り返すのだ。中でも面白いのが、「タイのジャングル46日間沢登り」の記録で、人跡未踏の地に挑む行動は角幡唯介の「空白の5マイル」を想起させ一気に読ませる。7週間分の食料等で荷物は45kgにもなり、そんな重荷を担いでの熱帯ジャングルでの沢登りは想像を絶する難行苦行だった。只、角幡は単独だったが、著者の場合は高柳という後輩が同行、仲間がいるのと単独では大違いがあり、その点では評価は大きく下げざるを得ないのだが、仲間は又喧嘩の元にもなり、ジャングルでの長い共同生活では相棒の一挙手、一投足にむかつき、イライラしてストレスは溜まるばかり、爆発寸前となる。この冒険の意義、成果がいか程のものか判らないが、本書の面白さは相棒への不満、悩みを隠す事無く赤裸々に曝け出している点にあるのは間違いない。

グループの名称が「セクシー登山部」と云うから、それだけでも人をおちょくっているし、「オレ達はそんじょそこらのエセ山ヤとは違うのだ」「オレ達だけが本物」という自意識過剰な文章は鼻持ちならないが、まあそれ位鼻息荒くなければやってられないという事でもあるのだろう。

著者は語る。「登山とは狂気を孕んだ表現活動」であり「生と死との境界線に立つ事によって生の実感が湧く」「死と隣り合せのギリギリの所で自然の内院に入り込み、そこに自分だけの何かを残したい」と。

管理された社会のモラルの中で羊のように飼い慣らされ、枠に嵌まってその範囲内でコントロールされる事に慣れきっている若者達の中で、著者等はまったく異質、どう考えてもタガの外れた連中で、見識のかけらもないように見えるが、節々で語られる言葉は思索的で考えさせるものも多々あり、気取りのない文章はいきいきとし読みやすい。文章力はなかなか達者なものだ。その実は見掛けとは大違いでかなりクレバー、語られる破廉恥な振る舞いは目に見えない大きな何物かへの挑戦なのだろうが、意識して悪ぶっているだけなのかもしれない。

本書を読み心底から触発され沢登りをやってみたいと思う者が出てくるかどうかは判らないが、前へ前へと未知への挑戦を続けるこういう若者が私は好きだ。日本はまだまだ捨てたものではないと拍手を送るのだが、皆さんはどうだろうか。読んでみて下さい。

2016年3月 「集英社インターナショナル」刊 1,600円 (AKA)